

南アルプスユネスコエコパークと大井川の水

静岡県にある大井川は、南アルプスの標高 3198m の間ノ岳を源流として、延長 168 km、流域面積 1,280 km²、平均降水量 3100 mm と多雨で、流量が多く急峻な川です。

その大井川の水は、多くのダムで発電をし、さらに志太平野や小笠平野や牧之原台地の農業用水や工業用水さらには生活用水として利用されています。

大井川で現存する最古の発電所は 1927 年(昭和 2 年)、大井川本流源流部に完成した田代ダムでした。この田代ダムの水は、水系・県境を跨いだ隣の山梨県に導水され発電が行われています。

その後次々とダムが建設され、日本最初の中空重力式コンクリートダムとして井川ダムが、さらに世界一の中空式コンクリートダムとして大井川水系で最大 137,000 kW の出力を有する畑薙第一ダムが完成しました。



畑薙第一ダム(世界一の中空重力式コンクリートダム)

1961年(昭和36年)、中部電力が本流に最後の塩郷ダム(塩郷堰堤)を完成させました。その当時、中部電力の土木技術者たちは「土木社史」の中で「ダム建設により大井川の水をすべて発電に利用することができた。しかし唯一心配なことがある。それは堆砂問題である。しかしこれは後世の土木技術者が解決してくれるであろう」と書いています。技術者が心配した理由は、フォッサマグナの崩落地帯が上流部にあり土砂の流出が多いので、流れ出る土砂がダムで堆積してしまうことでした。さらに、発電のために管路を水が流れ本流に水が流れなくなることでした。ダム建設によってもたらされる堆砂問題は、技術者の期待に反して解決されることはありませんでした。

静岡市葵区井川(旧井川村)、川根本町(旧榛原郡中川根町・本川根町)、島田市(旧榛原郡川根町)など大井川流域に住む住民は、大井川本流から水がなくなり生活用水の確保に窮し、堆積した土砂による河床上昇で水害が多発するなど、大きな影響がありました。

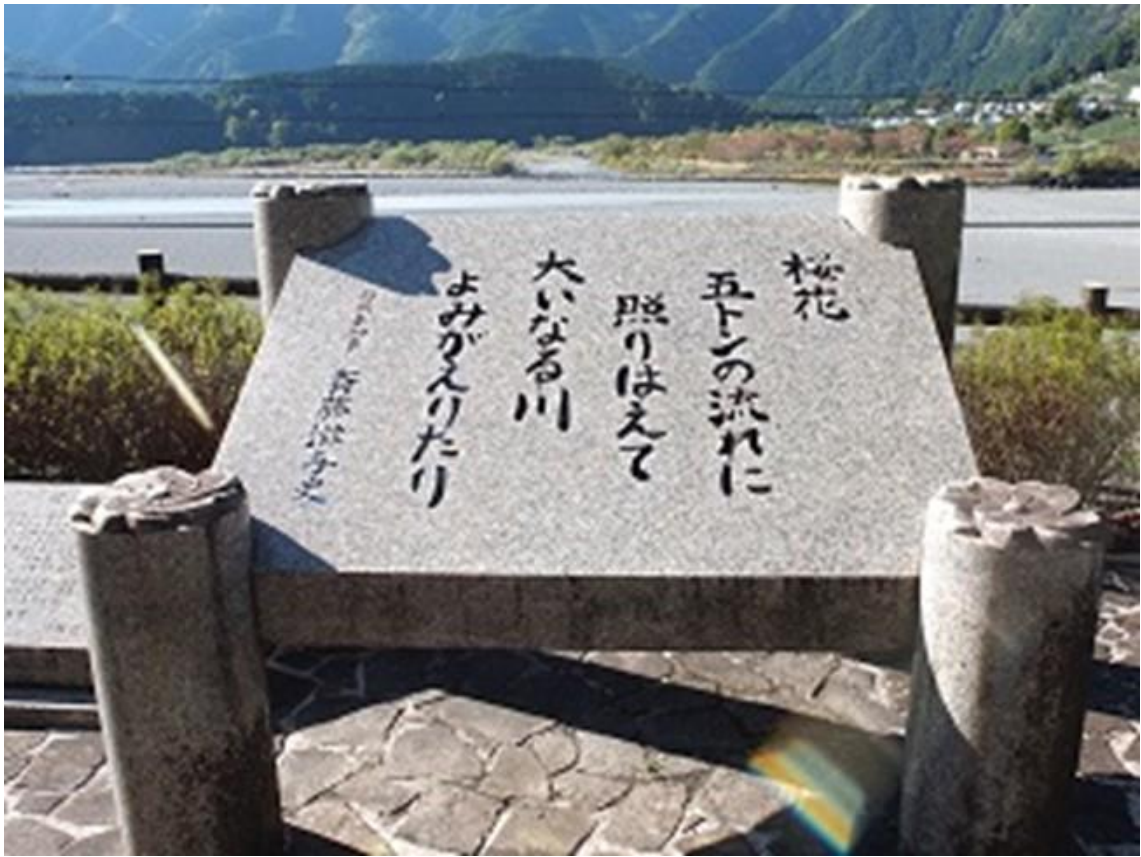
当時私は、静岡県議会議員としてこの榛原郡が選挙区でしたので、本流の最上流部の田代ダムから井川ダムそして塩郷堰堤など頻繁に通いました。

「塩郷堰堤ができて砂利が更に溜まり、もう鮎も自然もなくなった。大井川の本流に源流部の赤石岳の赤い石がなく、砂利は支流の寸又川のもので本流からは来ていない。ダムの堆砂は大問題だ！」ダム建設前の豊かな大井川を知っていた塩郷堰堤がある旧中川根町の皆さんの話は切実でした。

当時流域住民は、豊かな水が流れアユが遡上していた昔の大井川に戻してほしいと、水利権の更新に合わせて「水返せ運動」を展開していました。

そんな運動の盛り上がりがあつて、斎藤静岡県知事は中部電力や国との交渉を重ねて1989年(平成元年)毎秒5トン(通年3トン農繁期5トン)の水が塩郷の堰堤から放流されるようになりました。

流水復活に尽力した斎藤知事は、この時の心境を「桜花 五トンの流れ 照り映えて 大いなる川 よみがえりたり」という短歌に託しました。この短歌石碑は、県道77号川根寸又峡線沿いにある大井川親水公園内に建てられています。



大なる川よみがえりたり(大井川親水公園)

次の水利権交渉は、2005年(平成17年)最上流部の東京電力田代ダムでした。東京電力の水利権は毎秒4.99トンでしたが、「環境保全」を目的とした河川法の改正もあったことから、最終的に1.49トン~0.43トン(季節変化)の水が下流へ流されることになりました。

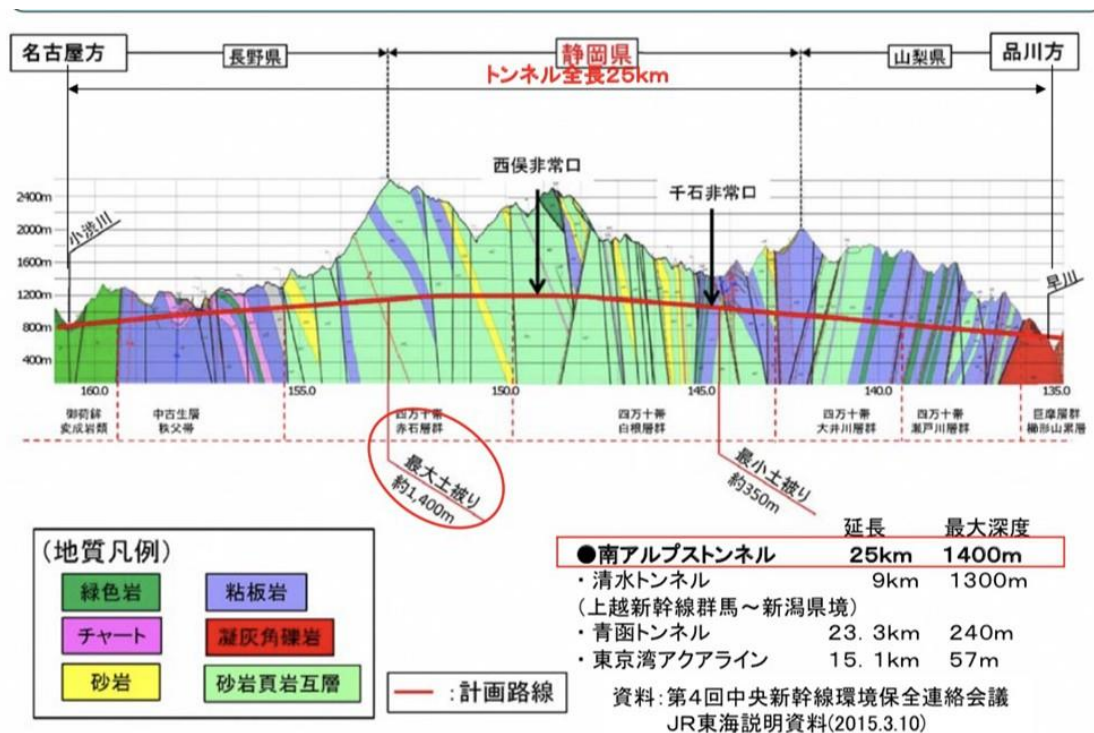
大井川には、本支流あわせて29のダムと15の発電所があります。総最大出力は、約73万kWです。そのため井川ダムから下流では、ほとんどの水が本流を流れることなく導水管で暗闇の管の中を流れていきます。大井川ダムから支流の水を集めながら久野脇発電所に流れ込む量は、毎秒78トンです。この水は、塩郷堰堤で貯められたわずかな水と笹間川で集められた水を加えて更に導水管の中を通過して川口発電所で吐き出されます。その量が毎秒90トンです。そのうちの毎秒42トンが、大井川農業用水(右岸・左岸)そして牧之原農業用水や工業用水として、さらに62万人の生活用水として周辺地域の人たちの生活を支えています。



大井川水系流域図

ダムの堆砂は、洪水調整機能を低下させ、海岸の砂浜減少を引き起こしています。2 度にわたる水利権更新で「川原砂漠」が解消されたわけではなく、かつての大井川の復活はまだまだ道半ばです。

そこにさらに大きな問題が出現しています。それは、南アルプス直下を通過するリニア新幹線の出現です。南アルプス直下数百メートル(最大深度1400m)に 25 kmのトンネルを掘ることによって、大井川源流部を流れる表流水や地下水が減ってしまうという心配です。



リニア新幹線 南アルプストンネルと断層

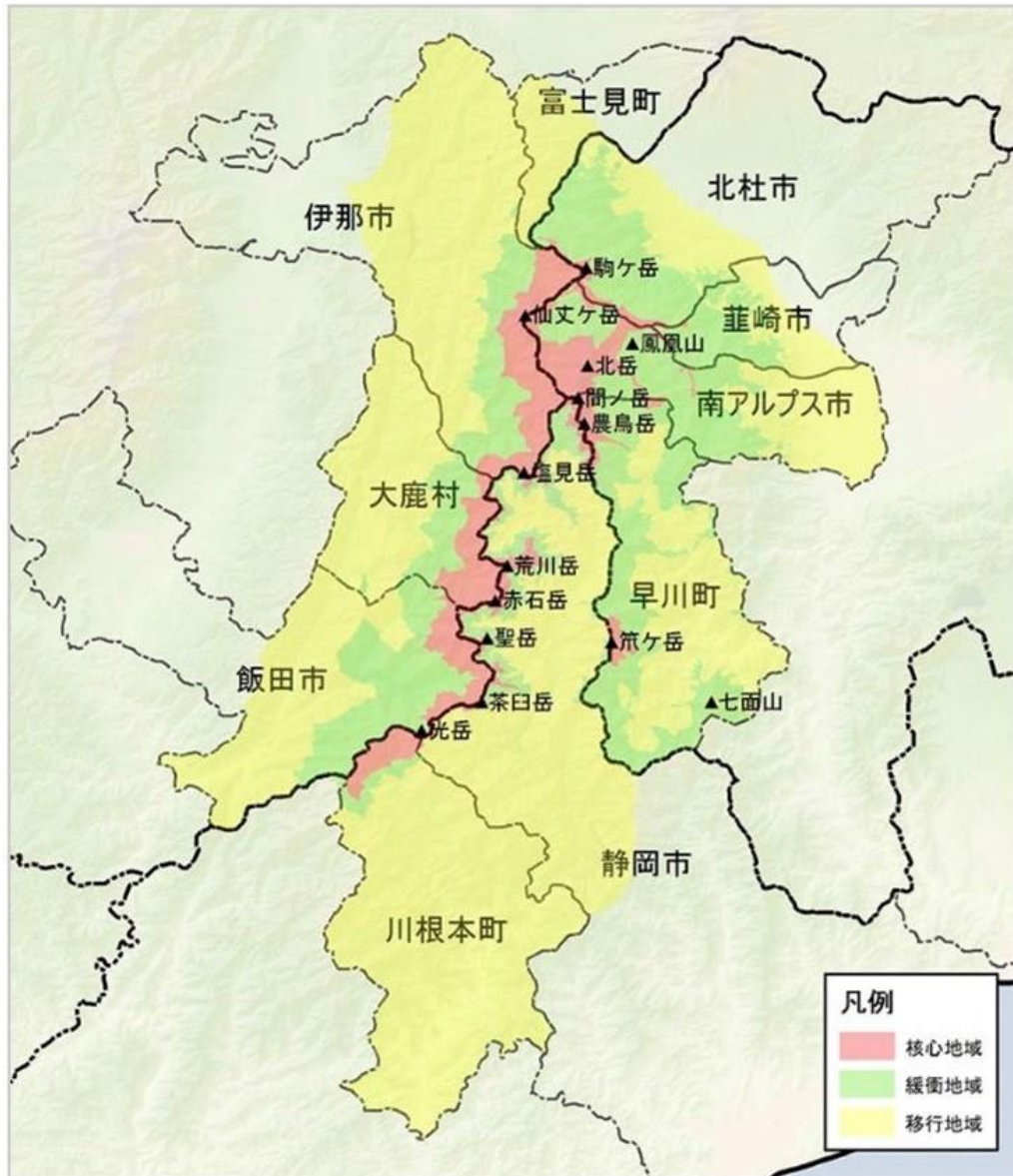
建設を進める JR 東海はその環境調査資料の中で「最大毎秒 2 トンの水が減るかもしれない」と予測しました。特に、トンネル個所は断層地帯であり、工事にあたって多量の溢水が予想され、その水が山梨県側に流れてしまうと静岡県では指摘しています。河川管理者の権限を持つ静岡県としては「一滴の水も他県に流してはならない！」と主張して工事を進めたい JR 東海と硬直状態です。

国土交通省が専門家会議を開催し検討をしていますが、地下数百メートルの水の行く末を見定めることは容易ではありません。

この議論は静岡県民を巻き込んで、6月の静岡県知事選挙の大きな争点になりました。「一滴の水も譲れない」「62万人の命の水を守る」という訴えは、周辺の水利用者のみならず、多くの静岡県民の琴線に触れ、現職の川勝知事の圧倒的勝利でした。

静岡県民だけでなく多くの国民の関心を引くリニア建設と水問題ですが、この地域は7年前に南アルプスユネスコエコパークとして認定された自然豊かな地域でもあります。リニア建設にあたっては、その自然が保護され、住民の生活が保障されるのが前提ですが、そもそもダム建設による電源開発や水利用でも同じことだったはずで

10の市町村がユネスコエコパークとして 結束



南アルプスユネスコエコパーク

ところが、川根本町が1980年(昭和55年)の12776人をピークに昨(こ)年(ねん)が6471人と半減(はんげん)しています。さらに上流部(じやうりゆうぶ)にある静岡市井川地区(しずくましいかわちく)は1961年(昭和36年)人口8600人(旧安倍郡井川村)をピークに、1969年(昭和44年)に静岡市に編入(へんにゅう)されて以降(いこう)も減少(げんじゆ)し続け、昨(こ)年(ねん)は430人と20分の一(じゆうぶんの一)になっています。

私たち大井川下流地域は、大井川から得られる水力発電の電気や、農業用水や工業用水や生活用水として恩恵を受け、農業も工業も発展し人口が増加してきました。

最上流部で 100 年前から発電用に山梨県に流されている毎秒 4.99 トンの水が、発電のために河川を流れないで暗い管路を流れ落ちていく毎秒数十トンの水が、大井川の河口から駿河湾に出て行かない毎秒数十トンの農業用水や生活用水が、上流部の自然とそこに住んでいる住民の皆さんを苦しめてきました。

恩恵を受けている住民や企業は学び気づくべきです。

リニアで失われるかもしれない毎秒 2 トンの水も同じです。

これまでの経過を学ぶためにまず現地に行ってみることだと思います。

南アルプスに、井川に、川根本町に、どんな貴重な自然が残っているのか？

その自然に向き合い共生しながら、地域の住民の皆さんがどんな思いを持って生活をしているのか？ 現地を見て、住民の皆さんの話を聴くことがスタートだと考えます。

南アルプスユネスコエコパークは、静岡県と山梨県と長野県に跨り 3 つの地域に分かれています。手つかずの自然を残す核心地域、自然を楽しむ緩衝地域、自然を守る人々が暮らす移行地域です。移行地域に暮らす住民の皆さんが、南アルプスの自然に誇りをもって、持続可能な生活ができるように、私たちも一緒になって考えていきたいです。

秋の紅葉シーズンがそろそろ始まります。静岡県に来ましたら、南アルプスユネスコエコパークがある大井川上流地域の静岡市井川や川根本町においでください！

文： [西原茂樹](#)，MIJBC 理事長

翻译编辑：JST 客观日本编辑部